

同志社大学

2014年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2015年 3月 19日提出

所 属	職 名	氏 名
日本語・日本文化教育センター	助教	築山 さおり
研 究 題 目	初中級日本語学習者を対象としたタスクの作成とタスク中心の教授法による効果について	
研 究 成 果 の 概 要	<p>近年、日本語教育における教授法は、従来の文法積み上げ式の教授法からタスクを取り入れた教授法に移行しつつある。</p> <p>この教授法では、</p> <ol style="list-style-type: none">① 学習者がいかに学ぶかというプロセスを重視する。② そのプロセスを活性化するための方法を工夫する。③ 学習者は与えられたタスクを遂行しながら、文法を基本とした運用能力やコミュニケーション能力を伸ばすことができる。 <p>とされる。また、運用力が伸び悩む傾向にある日本語学習者に対しては、コミュニケーション活動の中で求められる言語形式に意識を向けさせるようなタスクを用い、実践に近い学習形式で取り組ませることが言語習得に有効であるとされている。</p> <p>しかし、これまで日本国内の初級総合教科書で主に用いられている教授法では、文法・文型の導入、パターン練習、応用練習の順に行われることが多く、文法を教えるための教科書となっている。さらに、学習者が日本語使用の見本とするべきモデル会話は全ての教科書にあるものの、その多くは授業で活用されることがなく、このことも学習者が正しく運用できない一因であると考えられる。</p> <p>日本語学習者が自然な日本語を使えるようになるには、学習者が既習の言語表現と実際の場面を適切に結びつけることができるようになることが、何よりも重要であると言える。</p> <p>そこで14年度の研究では、国内の日本語教育機関で主に使用されている初級総合教科書のモデル会話の場面を、由井(2003)、(2005)を参考に、参加者(人数・性別・国籍・年齢・職業・関係・心理)、場所、時間、機能・目的、言語(媒体・文法・文体)、話題の13の観点から分析した。</p> <p>その結果、上の13項目のうち、参加者(年齢・人間関係・心理)、時間、話題、場所、機能・目的の7項目は不明な場合が多いことが明らかとなった。特に、人間関係や機能・目的が不明であることは、学習者の誤用の誘因となることが分かった。</p>	